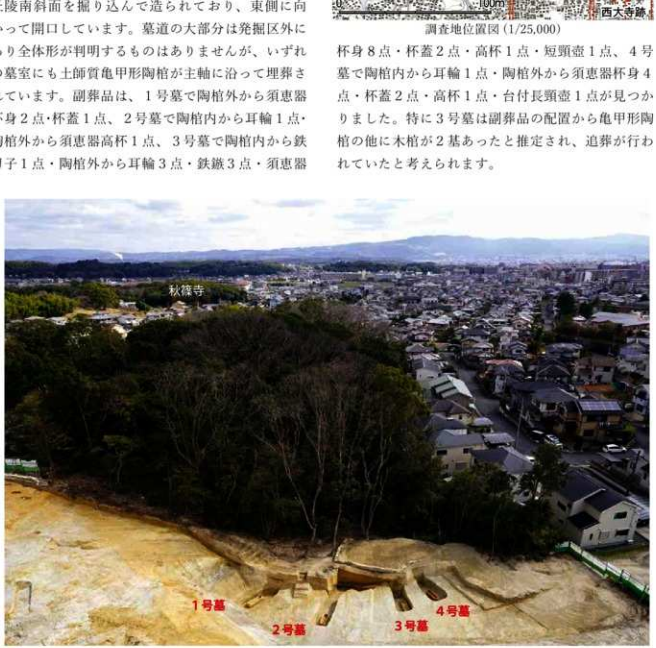
新発見の横穴墓群

秋篠阿弥陀谷横穴墓群　秋篠町

奈良盆地北西部では6世紀後半から7世紀中頃にかけて、丘陵の南斜面に横穴を掘削し遺体を埋葬する「横穴墓」がさかんに造られます。遺体は陶棺と呼ばれる素焼きの棺や木棺に埋葬されています。今回紹介する横穴墓群もその一つで、令和元年度の大和中央道建設に伴う発掘調査で新たに見つかり、秋篠阿弥陀谷横穴墓群と呼ぶことにしました。

横穴墓群の概要　飛鳥時代の横穴墓が4基見つかりました。横穴墓群は秋篠寺西方の東西方向に延びる丘陵南斜面を掘り込んで造られており、東側に向かって開口しています。墓道の大部分は発掘区外にあり全体形が判明するものはありませんが、いずれの墓室にも土師質亀甲形陶棺が主軸に沿って埋葬されています。副葬品は、1号墓で陶棺外から須恵器杯身2点・杯蓋1点、2号墓で陶棺内から耳輪1点・陶棺外から須恵器高杯1点、3号墓で陶棺内から鉄刀子1点・陶棺外から耳輪3点・鉄鏃3点・須恵器杯身8点・杯蓋2点・高杯1点・短頸壺1点、4号墓で陶棺内から耳輪1点・陶棺外から須恵器杯身4点・杯蓋2点・高杯1点・台付長頸壺1点が見つかりました。特に3号墓は副葬品の配置から亀甲形陶棺の他に木棺が2基あったと推定され、追葬が行われていたと考えられます。

調査地位置図（1/25,000）

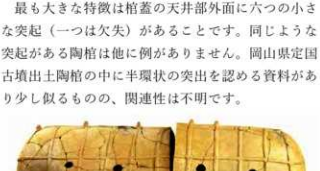


秋篠阿弥陀谷横穴墓群全景（西から）

陶棺の特徴　1～4号墓から1基ずつ出土した土師質亀甲形陶棺は、その特徴から7世紀前半に製作・埋葬されたと推定できます。陶棺は大きさが徐々に小さくなり、連動して棺身の脚数が減少していくという変遷が認められます。これによって、1・3号墓陶棺（12脚）→4号墓陶棺（12脚）→2号墓陶棺（10脚）の順に製作されたと推測されます。ここでは、蓋と身が組み合う1・2・3号墓陶棺について言及してみたいと思います。

1号墓陶棺　棺身（全長189㎝・高さ49㎝）と棺蓋（全長177.5㎝・高さ39.5㎝）で構成され、棺身は糸切り、棺蓋はヘラ切りで二つに切断されています。脚は6行2列です。棺身・棺蓋ともに縦横の突帯を貼付けて上下2段の格子状装飾を行い、脚には透孔を一つずつあけています。

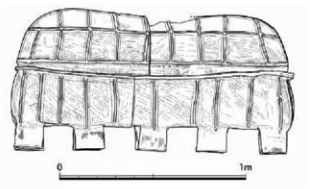
最も大きな特徴は棺蓋の天井部外面に六つの小さな突起（一つは欠失）があることです。同じような突起がある陶棺は他に例がありません。岡山県定国古墳出土陶棺の中に半環状の突出を認める資料があり少し似るものの、関連性は不明です。



1号墓陶棺

2号墓陶棺　棺身（全長151㎝・高さ46㎝）と棺蓋（全長147㎝・高さ35㎝）で構成されます。棺蓋に透孔がなく、脚が5行2列であるなど他に類例がない特徴がみられます。脚が5行であるため、中央の脚を避けた位置で糸切りにより切断しています。最も小型化する7世紀中頃の陶棺の脚は4行2列（8脚）なので、6行2列からの過渡的段階を示す貴重な資料と言えます。

ところで、この陶棺をみて何か違和感がありませんか。棺蓋の口縁部が水平でないのに、横方向の突帯は水平に貼付けられているので奇妙に感じてしまいます。その原因は、棺身の蓋受けの上で棺蓋が製作されたために生じたと考えられます。蓋受けの上面は長側面の中央が下がっていて、この形状が棺蓋の口縁部形状と合致します。また、棺蓋の口縁部端面外周に沿って成形台の輪郭を示す段差が一部残っており（写真）、その輪郭を追っていくと蓋受けの外形線と一致しました。水平な成形台の上で棺蓋をつくるのが通例で、棺身蓋受けを利用した棺蓋製作の確認例は初めてです。



2号墓陶棺蓋身の結合状態（長側面）

2号墓陶棺蓋端面にみられる段差

3号墓陶棺　棺身（全長193.5㎝・高さ47㎝）と棺蓋（全長181.5㎝・高さ40.05㎝）で構成され、棺身は糸切り、棺蓋はヘラ切りで二つに切断されています。棺蓋の透孔に陶栓が挿入された状態で出土しており、陶栓の用途を確定できる好例となりました。脚は1号墓陶棺と同様に6行2列です。棺身は縦方向の突帯のみで装飾し脚に透孔がない点で2・4号墓陶棺と共通しており、同時期に製作された1号墓陶棺と特徴が異なります。

突帯装飾の相違や脚部透孔の有無は製作者グループの違いによって生じていると考えられます。

3号墓陶棺